
スเปนサーコレクション蔵奈良絵本源氏物語について

——挿絵の場面選択にみる物語解釈——

青木 慎一

〈立教大学〉

はじめに

本発表では、ニューヨーク・パブリック・ライブラリのスเปนサーコレクションに所蔵される奈良絵本源氏物語（以下、スเปนサー本と略称）を中心に、挿絵の場面選択から物語解釈の問題について考えていきたい。

『源氏物語』を描いた奈良絵本のうち、現在所在が確認できるものはそれほど多くない。とくに54帖揃いで残っているのは、アイルランドのチェスター・ビーティ・ライブラリに所蔵される2種の本と、天理大学図書館蔵本、スเปนサー本の計4本である。これに東洋大学図書館や鶴見大学図書館など各所に分蔵される、もとは一揃いであったとおぼしき半紙縦型奈良絵本を加えても、わずかに5本を数えるのみである¹。

本発表であつかうスเปนサー本については、反町茂雄氏の紹介²のほか、近年は石川透氏に指摘が見られる³。石川氏によれば、スเปนサー本は「現在閲覧停止中」とのことである。このような事情もあってか、書誌情報をはじめ、スเปนサー本の詳細が分かる研究は管見の限り見当たらない。

発表者は立教大学の小嶋菜温子教授を研究代表者とする科研プロジェクト⁴に携わり、主として『源氏物語』の図像資料について調査を行った。上記のプロジェクトは図像をとまなう王朝文学の資料の調査・研究を目的としており、スเปนサー本についても調査を許された。同本については、すでに資料紹介を主眼に発表したことがある⁵。これらの調査・発表で得られた知見をもとに、本発表ではスเปนサー本に見られる『源氏物語』の解釈について検討したい。

1. スเปนサー本の概要

早くにスเปนサー本の紹介がなされた反町茂雄氏の目録には以下のように記される⁶。

源氏物語 延宝元禄頃写。奈良絵本 54冊

金欄表紙。書画ともごく尋常の奈良絵本。保存極良

1 石川透「奈良絵本制作の一側面」『奈良絵本・絵巻の生成』三弥井書店、2003

2 反町茂雄編『スเปนサー コレクション蔵 日本繪入本及繪本目録 増補改訂版』弘文荘、1978

3 石川透「『源氏物語』の絵入り写本」『奈良絵本・絵巻の展開』三弥井書店、2009

4 2006～2008年度科学研究費補助金基盤研究(B)「王朝文芸の中世・近世における図像的展開をめぐる総合比較研究」（研究代表者：小嶋菜温子）

5 青木慎一「スเปนサー・コレクション蔵「奈良絵本源氏物語」について」、奈良絵本・絵巻国際会議ワシントン大会、於：フリア美術館、2009年3月26・27日

6 反町茂雄編『スเปนサー コレクション蔵 日本繪入本及繪本目録 増補改訂版』弘文荘、1978

次に、調査で得た書誌情報を挙げる。

[体裁] 奈良絵本、綴葉54帖

[時代] 江戸前期写

[寸法] 縦24.0糎、横18.0糎

[表紙] 香色地金欄模様

[外題] 中央上題簽に「きりつほ」等と墨書（題簽の寸法—縦15.9糎、横3.5糎）

[内題] なし

[見返] 布目金紙

[料紙] 斐紙

[行数] 10行

本文については、実際に「桐壺」巻の翻刻を行って調べた。その結果、本文は省略されることなく、全文が載せられていること、山本春正の『絵入源氏物語』の本文とほとんど同じであることが判明した。もちろん全ての本文が一致するわけではないが、仮名遣いの差異を除いては接続詞程度の異同にとどまり、大きな異同は確認できなかった。書写者については全帖を精査したわけではないものの、概観した限りでは一筆であり、筆者は後述する「居初つな」と推定される。

2. スペンスー本の挿絵情報

続いて、スペンスー本の挿絵について述べる。スペンスー本の挿絵は各巻1～9場面を絵画化し、その図様は多くの絵で『絵入源氏物語』の挿絵に近似する。「桐壺」巻から「夢浮橋」巻までの全54帖で233図の挿絵を配する。『絵入源氏物語』の総挿絵数は226であり、スペンスー本は『絵入源氏物語』よりも7図多いことになる。

面貌表現や建物の構図などの特徴から、スペンスー本の絵師は「居初つな」と考えられる。とりわけやや縦長の楕円型の顔に頬紅をさしたようなかわいらしい顔は独特である。こうした特徴ある面貌表現を持つ本は他にも存在し、たとえば実践女子大学蔵の奈良絵本「さごろも」や「伊勢物語の歌絵」、石川透氏蔵の「伊勢物語」や「鉢かづき」などが挙げられる⁷。「居初つな」という人物と奈良絵本制作の関連については、石川透氏により詳細な研究がなされている⁸。ここでは要点を挙げるにとどめるが、「居初つな」は往来物作者の母を持ち、「往来物の執筆から奈良絵本・絵巻の制作、版本の筆工」までこなした女性であったという。奈良絵本・絵巻の制作した人物の名前が分かること自体がまれであるにもかかわらず、「居初つな」の場合は素性や性別まで明らかとなっている。女性の手になる確証を有する奈良絵本・絵巻は「居初つな」のほかに類を見ず、文化史的にも興味深い事例と言えよう。「居初つな」が活躍した時代は少なくとも貞享から元禄まで、長ければ享保までと見られ、描かれた挿絵の比較検討を通じて、当時の一女性の『源氏物語』解釈の様相を捉えたい。

スペンスー本と『絵入源氏物語』の挿絵を比較してみると、大部分の挿絵で構図や人物配置が一致し、その割合は85パーセントほどとなる。その一方で『絵入源氏物語』の挿絵とは異なる図様の挿絵が約30図強見られる。両本の差異を検討してみると、『源氏物語』第一部の中盤から後半にかけて（滯標～藤裏葉巻）と宇治十帖で違いが顕著であった。こうした両本の違いに着目することで、スペンスー本の特徴や物語解釈

7 石川透「居初つなの作品一覧」（注3掲書）

8 石川透「居初つなの奈良絵本・絵巻」（注3掲書）ほか

が浮き彫りになってくるはずである。次節以降では個別の問題にしぼり、挿絵からうかがえる物語解釈について論じることとする。

3. スペンサー本の挿絵の場面選択—I

それでは、挿絵の絵画化にあたり、物語解釈が可視化される段をいくつか紹介していきたい。まずは、柏木第三図（参考図版1）である。参考図版では、薫を抱く光源氏の前に二人の女房が仕えているが、スペンサー本では画面右下、参考図版では霞の部分にもう一人女房が描き加えられる。こうした女房の追加（減らされることも稀にある）は、スペンサー本の挿絵に散見される事象である⁹。次に、宿木第一図（参考図版2）を見る。参考図版では帝に対面する人物は薫ただ一人だが、スペンサー本では簀子縁に対座する二人の女官が描き込まれる。続いて、葵第五図（参考図版3）と夕顔第二図（参考図版4）に移る。参考図版のいずれの場面も光源氏と従者を室内に描く。しかし、スペンサー本の葵第五図は、襖を取り払い、女房たちの居室を描き出し、同夕顔第二図では、光源氏と従者の空間を画面下半分にとどめ、画面上半分に主人である尼君方の居室を新たに描く。このように、スペンサー本では物語の本筋には関わらない部分においても、女房たちの人数や居所に注意を払う傾向がある。

最後に、スペンサー本の絵合第二図に言及する。『絵入源氏物語』において「絵合」巻は2場面絵画化される。しかし、スペンサー本ではさらに一図描き起こし、計3場面を絵画化する。『絵入源氏物語』で描かれるのは、秋好中宮の入内と帝の御前での絵合の場面で、スペンサー本も同様である。このことから、スペンサー本が新たに加えたのは中宮御前での絵合の場面だということが分かる。これは先に見た女房たちの追加という物理的な問題とは違い、物語の中心的テーマに関わる差異である。ただし、いずれも女房や女君といった女性の存在にまつわる差異であり、制作者が物語に配される女性たちに留意し、意識的に絵画化する姿勢はうかがえよう。物語のなかで、秋好中宮の御前での絵合は、そのあらましを詳しく語られる。この絵合において優劣がつけられなかったことで、後に帝の御前での絵合が挙行されることになった。しかも、絵合に供された物語の論評は秋好中宮の絵合でと捉えていた可能性がある。つまり、中宮御前での絵合に積極的な意味を見いだした結果としての絵画化があったと言えよう。このような物語の読みに関する問題は、スペンサー本の制作背景と密接に関連することとなる。なぜなら、『源氏物語』の奈良絵本を制作するにあたり、どれだけの知識をもって制作にあたったのかが焦点となるからだ。次節ではスペンサー本がいかなる物語理解にもとづいて制作されたのか考えてみる。

4. スペンサー本の挿絵の場面選択—II

先にスペンサー本と『絵入源氏物語』の挿絵の違いが、『源氏物語』第一部の中盤から後半にかけて、巻で言えば「滯標」から「藤裏葉巻」までに多く見られることを指摘した。ここでは「少女」巻を取り上げ、スペンサー本の『源氏物語』理解について論じたい。

「少女」巻の絵画化をめぐるのは、『絵入源氏物語』が6図、スペンサー本が7図であるが、そのうち両本の挿絵が近似するのはほぼ半分の3図である。両本の場面選択を次ページの表にまとめた。

この表を見ると、スペンサー本の少女第一図・第四図・第七図と、『絵入源氏物語』の少女第一図・第二図・第六図が、それぞれ類似の図様であることが分かる。また、スペンサー本が巻の前半部を主として絵画化する一方、『絵入源氏物語』は巻の後半部に挿絵を多く用いる。結論から述べてしまえば、スペンサー本が「少

9 例外的に、鈴虫第一図は『絵入源氏物語』で絵画化されていた女三宮方の居室を描かず、男君たちが管弦の遊びを行うという男性的空間を創出するが、この意味については別稿で論じる予定である。

スペンサー本	絵入源氏物語
少女第一図 夕霧の寮試予行	少女第一図 夕霧の寮試予行
少女第二図 夕霧、雲居雁の琴の音を聞く	該当なし
少女第三図 夕霧が「小夜中に」の歌を詠む	該当なし
少女第四図 豊明の節会で舞姫が舞う	少女第二図 豊明の節会で舞姫が舞う
少女第五図 冷泉帝の朱雀院行幸	該当なし
少女第六図 六条院の春の情景・秋の情景	少女第三図 六条院の南東の町（春の情景）
該当なし	少女第四図 六条院の西南の町（秋の情景）
該当なし	少女第五図 六条院の北東の町（夏の情景）
少女第七図 六条院の馬場殿の情景	少女第六図 六条院の馬場殿の情景

女」巻全体を通しての物語展開に重きをおいた構成であるのにたいして、『絵入源氏物語』の挿絵は六条院の四季の町を中心とする構成をとる。では、スペンサー本は『絵入源氏物語』で描かれなかった場面をいかに絵画化したのだろうか。以下場面選択や図様の分析を通して、挿絵の絵画化と物語理解の関係を考察する。

スペンサー本の少女第二図・第三図は、光源氏の息子である夕霧の物語にまつわる挿絵である。『源氏物語』において、夕霧という人物は主人公とは言えないながらも、物語の要所要所で重要な役割を果たす人物である。しかし、『源氏物語』の享受史や研究史を振り返ってみても、よく取り上げられる人物とは言いがたい。また、いわゆる「源氏絵」と呼ばれるような王朝絵画においても、図像化されることはさほど多くない。しかも、今回考察の対象としている「少女」巻の夕霧を絵画化した作例はほとんどないと言っていいだろう。にもかかわらず、スペンサー本は「少女」巻の夕霧を2場面も絵画化しているのである。「少女」巻における夕霧の物語は、夕霧の恋物語と大学寮への入学が軸となって展開する。スペンサー本の挿絵の構成は、寮試の予行にはじまり、雲居雁との恋、さらには五節の舞姫への懸想と、夕霧の物語を網羅的におさえている。「少女」巻全体で夕霧物語は半分を超える分量を持ち、その意味でもスペンサー本は物語本文と対応する。このような夕霧の場面をあえて絵画化するには、そこに意図があるのはもちろんのこと、物語にたいする相応の知識がなければできないことである。

続いて、少女第五図でも物語への深い理解がうかがえる。本挿絵の場面は、朱雀院邸に冷泉帝が行幸し、光源氏も含めた三者の対面がなされるところである。この部分の本文を次に引用する¹⁰。

帝は赤色の御衣ぞたてまつれり。召しありて太政大臣参りたまふ。同じ赤色を着たまへれば、いよいよひとつものとかかやきて見えまがはせたまふ。人々の装束用意、常にことなり。院もいときよらにねびまさらせたまひて、御さまの用意、なまめきたるかたにすすませたまへり。

スペンサー本はこの場面を絵画化するにあたり、縹縹緑の暈に座る冷泉帝の衣服を赤系統の色で描く。また、冷泉帝に向かい合うように座す光源氏の衣も冷泉帝と同系色で描かれる。しかし、冷泉帝と同じく縹縹緑の

10 『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。

上に描かれる朱雀院の衣服には濃緑色が用いられ、冷泉帝や光源氏の服装との違いを明示するかのようである。少女第五図の挿絵は、スペンサー本の挿絵が細かな描写まで物語本文に則っている事例と言えよう。

さらに、少女第六図でもスペンサー本の工夫が看取できる。『絵入源氏物語』では、六条院の南東の町（春の情景）と西南の町（秋の情景）を一図ずつ用いて絵画化する。スペンサー本の場合には、一画面に春秋の情景を描き込む。スペンサー本では、一画面の中央を細い霞で区切り、画面上部に春の景を、画面下部に秋の景を配する。いずれの風景も、季節に応じた景物を描き入れる。たとえば、春は桜、秋は紅葉というように、観者に紛うことない季節感を表している。これは六条院の象徴とも言える四方四季の庭のうち、主要な女君の住む町の庭の景を選び取った結果である。ただ『絵入源氏物語』の挿絵にならっていずれか一図を模倣するのではなく、六条院の四季の庭の意味を理解し、代表的な春秋の庭を一図に組み込むことで六条院世界の表現を可能にする。それと同時に、六条院以外の場面の絵画化に成功しているとも言えるのではないか。

このように、スペンサー本にしか見られない挿絵には、「制作者」の物語解釈や享受のさまがうかがえるのである。いま「制作者」という言葉を用いたが、スペンサー本の場合には「居初つな」と言って差し支えないだろう。本来絵入り本や絵巻の「制作者」という際には、注文主や作品制作を統括するような人物、実際に絵を描く絵師など広義に用いられる。今回スペンサー本の挿絵を描いた「居初つな」は、往来物を著すほど教養のある人物であり¹¹、往来物の注には『源氏物語』や『伊勢物語』などが引かれている。言うまでもないことだが、「居初つな」が制作した奈良絵本の作品の中に、『源氏物語』や『伊勢物語』も含まれているのである。こうしたことから、石川透氏は「奈良絵本を写すと同時に、その知識を身に付けている」と指摘する¹²。スペンサー本の挿絵を通して、物語への造詣の深さが読み取れる。「少女」巻の挿絵の傾向について、先に巻全体の物語展開を重視した構成と指摘したが、スペンサー本の7図を順に鑑賞していくと、「少女」巻の概略がつかめるようになっている。スペンサー本の全挿絵が「居初つな」の画風をそなえ、所々に独自の絵が見られることから、他者からの指示や指導があったとするよりも、彼女の解釈にもとづいて絵画化が進められたと考えるほうが妥当ではなかろうか。

5. スペンサー本の挿絵の場面選択一III

今度は宇治十帖の場面選択を検討する。宇治十帖においては、『絵入源氏物語』の同巻と比べて、絵画化される場面数が多い巻は見られない。むしろ、『絵入源氏物語』よりも収録される挿絵が少ない巻が数巻確認されるのである。『絵入源氏物語』では絵画化され、スペンサー本で削られた場面を以下に挙げる。

- ・中君が匂宮邸に迎えられる直前、宇治にて薫とともに亡き大君を偲ぶ。(早蕨巻)
- ・薫が浮舟を三条の隠れ家から宇治の邸へ移す。(東屋巻)
- ・浮舟と再会し三日を過ごした匂宮が帰京する。(浮舟巻)
- ・宮の君と呼ばれる女房と語り、八宮の姫君たちのことを思い起こした薫が「ありと見て」の歌を詠む。(蜻蛉巻)

このように、スペンサー本で削除された場面を見ると、大君や浮舟のことを語る段を省略する傾向がうかがえる。

さらに、宇治十帖では『絵入源氏物語』と同数の挿絵が収められる巻でも、描かれる場面が異なる巻が存在する。それをまとめたのが次の表である。

11 「居初つな」の往来物に関しては、石川松太郎監修『往来物大系』・同『稀観往来物集成』、小泉吉永編『江戸時代女性文庫』（いずれも大空社刊）を参照されたい。

12 石川透「奈良絵本・絵巻の制作者、居初つな」（注3掲書）

『絵入源氏物語』で採られた場面	スペンサー本で採られた場面
大君死去。(総角巻)	匂宮から中君に後朝の文が届けられる。(総角巻)
薫が召人である按察の君のもとを訪れる。(宿木巻)	中君が薫へ返歌をしたためる。(宿木巻)
東国からやってきた浮舟の一行が宇治橋を渡ってくるところに薫が出会う。(宿木巻)	大君の死後、薫が中君へ想いをつのらせてゆく。(宿木巻)

これを見ると、先に見た割愛場面と同様に、大君や浮舟に関連する場面が除かれていることが分かる。それらに代わるものとして描かれるのが、中君のことを語る場面である。これらの事例からは、大君や浮舟にまつわる場面を、強いて中君の物語へと差し替えたことが指摘できよう。スペンサー本が『源氏物語』の深い理解にもとづき、挿絵を制作していることを前節にて述べた。「総角」巻で大君が亡くなる場面は、文字通り彼女の物語の最後を語る部分であり、「宿木」巻で宇治橋の向こうから浮舟がやって来る場面は、浮舟が初めて物語に登場するところである。さらに、「蜻蛉」巻で薫が「ありと見て」の歌を詠む場は、巻名の由来ともなった象徴的な場面である。いずれもが物語において重要な場面であり、無作為にこうした場面を省いたとは考えがたい。まして、物語を知っている者が挿絵を描いたスペンサー本においては、そこに何らかの意図を読み取ることが適切であろう。それでは、なぜスペンサー本がこうした場面選択をしたのか考えてみる。

ここでは試案を提示するにとどめるが、一つに中君が『源氏物語』において幸せな人物として語られることが挙げられよう¹³。大君は物語中で薫と結ばれることなく亡くなってしまい、浮舟も薫と匂宮との間で悩み出家する。こうした二人とは対照的に、中君は宇治の住まいから都の邸に迎え取られ、匂宮との間に皇子を設ける。中君自身はたびたび匂宮との関係をめぐり苦悩するが、周囲は中君の社会的成功から、彼女を幸運な女性ともてはやす。スペンサー本の挿絵の場面選択にあたり、中君をどう認識していたのか。内面的苦悩に耐えることによって社会的成功を果たした女君としてなのか。それとも単に社会的栄達を手にした幸運な姫君であったのか。この解釈については、中君が描かれる他の場面やスペンサー本以外の場面選択などとあわせ、慎重に検討する必要があるだろう。しかし、大君や浮舟といった縁起の良いとはいえない物語を持つ人物たちの絵画化を回避した事実は指摘できよう。少なくとも宇治十帖の挿絵の場面選択には、スペンサー本の解釈がはたらいているのである。

まとめ

以上のように、スペンサー本と『絵入源氏物語』の挿絵を比較することで、スペンサー本の挿絵に見られる物語解釈を明らかにしてきた。本文や挿絵の近似性から、一見『絵入源氏物語』を単純に書き写した絵本と見られやすい。しかし、スペンサー本にはスペンサー本の制作意図が存在する。それは、女房たちの描き入れといった小さなところから、六条院の絵画化や宇治十帖の場面選択など、物語解釈に大きく影響する部分までさまざまだ。いずれにせよ、スペンサー本は『源氏物語』についての一定の理解をもって制作されたことは確実である。スペンサー本の物語解釈のありようは、スペンサー本個別の問題に限らず、当時の『源氏物語』享受を考える意味でも興味深い。

今後、さらに同本の物語解釈を考えてゆくには、スペンサー本の挿絵全体にわたる、より詳細な検討が必要となるだろう。また、スペンサー本以外の現存する奈良絵本と比較することで、スペンサー本独自の問題が明確になるはずだ。今後の課題としたい。

13 中君の状況と彼女をめぐる「幸い」・「幸い人」の表現については、原岡文子「幸い人中の君」『源氏物語の人物と表現 その画義的展開』（翰林書房、2003）に詳しい。



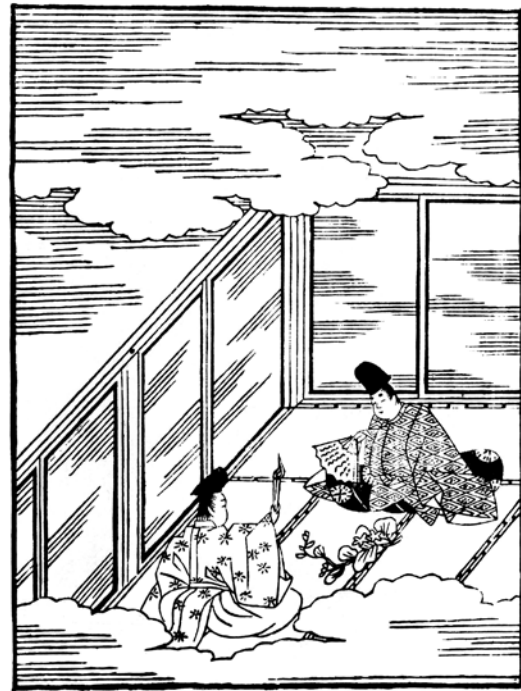
参考図版 1 (柏木第三図)



参考図版 2 (宿木第一図)



参考図版 3 (葵第五図)



参考図版 4 (夕顔第二図)

* 参考図版として掲げた『絵入源氏物語』の挿絵については、日本古典文学会編『絵本源氏物語』（貴重本刊行会、1988）から転載した。